



# 私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(8)「横井家文書」所収の横井大平関係文書中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 克彦, Tsutsumi, Katsuhiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/61.2">https://joshihi.repo.nii.ac.jp/records/61.2</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 私立女子美術学校創始者横井玉子の 夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰(8)

「横井家文書」所収の横井大平関係文書中心に

▶堤克彦

## はじめに

このシリーズは熊本大学附属図書館寄託の「横井家文書」所収の横井左平太・大平書翰27通をもとに、その紹介を『女子美術大学紀要』第45号(2014年度)から始めた。ただ第51号(2020年度)の「研究報告」は、沼田哲・元田竹彦編『元田永孚関係文書』(近代日本史料選書14 山川出版社 1985年)所収の「横井左平太書翰」2通、即ち「津田亀太郎・林玄助・横井左平太書翰」(在米、和暦十二月二十日、八右衛門宛在熊本)と「伊勢佐太郎書翰」(在米、西洋一八七一年第一月二十三日、我明治二年十二月二十三日、下津休也・元田八右衛門〔元田永孚〕宛在熊本)を追加資料として紹介した。

本号では再び「横井家文書」所収の横井左平太の弟大平に関する明治三(1870)年から同四(1871)年までの書翰と公文書を取り上げたい。

明治三(1870)年は、左平太(26歳)は「アナポリス海軍学校」在学中であったが、大平(21歳)はその前年の明治二年に帰国し、長崎で肺患の療養をしていた。これに関しては『女子美術大学研究紀要』第50号(令和2年3月発行)所収の本シリーズ(6)を参照されたい。

左平太(27歳)は明治二(1869)年一月五日に叔父横井小楠(準養子)が暗殺され、その後の家督相続のこともあって、明治四(1871)年十一月十九日に一時帰国するが、先に帰国していた大平(22歳)は、同年四月二日に熊本の宿許ですでに死去、尽力した「熊本洋学校」の九月開校を見届けることができなかった。その経緯については後に詳述するこ

とにして、まず沼川三郎(横井大平)関係の書翰・公文書〔3通〕について見ていきたい。

## 一、「町田(久成)外務大丞書翰」

明治四(1871)年四月二日に死去した沼川三郎(横井大平)に関する㊸A150「町田(久成)外務大丞書翰(三月五日)・沼川三郎(横井大平)宛」から見ていきたい。

### 【釈文】

御放離已来、御安否御窺不申候得共、如何御容體御座候哉。常々御案し申上候。

偕(さて)は、先度御帰朝之頃、御尋ニ相成候米國御勤学御手当之儀、貴員(ま、君)御頂戴分ハ、御受納ニ相成候而可宜旨申上候處、伊勢(変名伊勢佐太郎、兄左平太)君方も御同様之儀ニ御答申上候得は、彼之方ニ而は、如何御汲取違ニ相成候哉。都而(すべて)之金高、御両所(両人の敬称、御二人様)ニ而御受取之賦(賦金)ニ御承知違相成候由。

実は小生方も粗陋之御答申上、恐縮ニ候得共、基より御手当金之高ハ、御承知之事ニて有之と存候より之事ニ而、全高御受取ニ相成候様之儀ニ而は無之、既ニ米國えも別紙写之通申越ニ相成候付、為御承知、別紙差上候通、宜敷御承知可被下候。先は任幸便、右大略。且御安否御尋旁申上度、勿々。如此御座候。以上

三月五日

町田(久成)外務大丞

沼川三郎様

○明治三(1870)年—左平太(26歳、在米)・大平(21歳、在長崎)		
沼川三郎(横井大平)関係〔3通〕		
33	A150	町田外務大丞書翰(明治三年三月五日)・沼川三郎(横井大平)宛・大平(明治四年四月二日死去)
34	A151	「横井大平履歴雛形」(月日不明)
35	A152	「横井大平履歴」(月日不明)
○明治四(1871)年—左平太(27歳、明治四年十一月十九日帰国)・大平(22歳、明治四年四月二日死去)、九月「熊本洋学校」開校。原玉子の入学(～明治五年七月)		

## 【解説】

まずこの書翰の差出人町田久成（1838～1897）は薩摩藩出身で、慶応元（1865）年に渡英、2年間滞在の後、慶応三（1867）年夏に英国から「薩摩藩第一次英国留学生」に加えられ、帰国後の明治元（1868）年には参与として外国事務に従事し、外務大丞に就任していた。その後、内務省に博物局を創設されると、初代帝国博物館長、晩年は僧籍に入り、滋賀県三井寺光浄院住職という経歴の持ち主である。

この書翰は町田久成が沼川三郎（大平）宛に送った公私併用の書翰である。この時期の町田久成は「外務大丞」で、在任期間は明治二（1869）年七月十日～明治三（1870）年九月二日までであった。そのことから、この書翰の日付「三月五日」は明治三年三月五日と確定できる。

また書翰中の「先度御帰朝之頃」云々から、沼川三郎（大平）は明治二（1869）年八月頃に帰朝したので、おそらくその直後に「御尋ニ相成候米國御勤學御手当之儀」云々の書翰を町田久成外務大丞宛に出して、この町田書翰は半年後の返信であったと思われる。

沼川三郎（大平）が「放離」（米国留学を辞めて帰国したこと）したのは明治二（1869）年七月で、日本には八月頃に帰着し、長崎の「肥後御屋敷」に居住した。その後もそのまま居住し、十二月頃にも肺病の治療を続けていた。

この件については、令和二（2020）年三月刊行の『女子美術大学研究紀要』第50号の「私立女子美術学校創始者横井玉子の夫左平太と弟大平の渡米前後の書翰」（6）所収の⑧A148「沼川三郎書翰」（在長崎、十二月九日）・宿元宛（母上・つせ子・又雄）を再読していただきたい。

前掲の「御尋ニ相成候米國御勤學御手当之儀」云々は、肺病治療中の沼川三郎（大平）が町田久成宛に発送した書翰に、療養中であることも書いていたので、町田はそのことを知っていた。そこで町田は翌三年三月五日の公私併用書翰を認めた際、沼川三郎（大平）に療養中の病気の「安否御覧い」をしていなかったことを詫び、帰国後の病気の容態について常々案じていたと記している。

先達て、沼川三郎（大平）が「帰朝の頃」（町田久成の「外務大丞」就任の明治二年七月十日以降であろう）に尋ねていた「米國御勤學御手当」について、外務省の方から「貴員（まま、君）御頂戴分ハ、御受納ニ相成候而可宜旨」、即ち米国留学中の支給金はそのまま「受納」し、返済の必要がないことをすでに伝えていた。

ところが在米中の伊勢佐太郎（左平太）の方からも「同様

の問い合わせがあり、返済の必要がないと返答していたが、佐太郎（左平太）が「如何御汲取違」（取り違え）をしたのか、全ての「金高」（支給金高）は「兩所」（左平太・大平の兩人）が「受け取り」（支給金額）分を「賦」（賦金）で返済するものと「承知違い」（勘違い）しているようだと記す。

その原因と責任は、自分の方が「粗陋」（丁寧でない）の答え方をしていたからと、「恐縮」している。しかし「基より」（最初から）「手当金」の「高」は十分「承知の事」と思っていたと記し、また「兩所」（左平太・大平の兩人）が支給額の「全高」を「受け取り」していたわけではないとも言っている。

佐太郎（左平太）の「承知違い」（勘違い）を解くために、「既に米國へも別紙写しの通り申し越し」しているが、承知の為に、沼川三郎（大平）にも送付し、別紙の通り宜しく承知されたいと記している。そして先は幸便に任せ、右大略を述べ、且つ沼川三郎（大平）の安否を尋ねかたがた申し上げたいと締め括っている。

以上の内容から、左平太・大平の渡米留学中の官費は返済の義務がなかったことがわかる。どうして二人が官費返済の件について聞き糾したのか、その理由はよくわからないが、兩人共官費支給全額を「賦」（賦金）で完済しなければならないものと勘違いし、そう思い込んでいたようである。

この左平太への「既に米國へも別紙写しの通り申し越し」云々については、その「別紙」の一部が、後の号で紹介する伊勢佐太郎（横井左平太）に関する明治八（1875）六月十四日付の⑩A140「海軍省会計局支給金報告雛形」（海軍省会計局）、⑪A139伊勢佐太郎の「海軍省報告」（海軍省罫線用紙使用）、六月三十日付の⑫A130「横井左平太渡米中の費用（ドル）報告」ではないかと思われる。

## 二、「横井大平履歴」について

つぎに見ていく「横井大平履歴雛形」は「月日不明」であるが、前掲の明治三年三月五日付の⑬A150「町田（久成）外務大丞書翰」とは関係なく、おそらく別便で、政府（「海軍省」と推定）から「横井大平履歴」の提出を求める公文書が送付されていたものであろう。

ただその時期は不詳であるが、沼川三郎（大平）没年の明治四（1871）年四月二日（享年22歳）以前か、その直後か、またはそれ以降かもしれないが、左平太（27歳）が明治四（1871）年十一月十九日の帰国時には「横井大平履歴」は未

提出のままであった。

つぎの「横井大平履歴雛形」(月日不明)は、左平太が弟大平宛の「雛形」に依拠して、後掲の㉔ A152「横井大平履歴」(月日不明)を作成する前に、普通の書翰用半紙に、メモ風に肉付けする内容を走り書きしたと思われる。

後号の左平太の「履歴雛形」との共通性と類似性があり、大平の場合も兄伊勢佐太郎(左平太)同様に「海軍省」からの公文書であったと思われる。後号掲載の「㉔ A131「伊勢佐太郎履歴」、伊勢佐太郎(在東京、明治八〔1875〕年七月二日・海軍省宛)の末尾〔鉛筆書き〕を参照されたい。なおつぎの積文中の〔 〕は左平太の訂正で、( )は筆者註であることを示す。

## 1、㉔ A151「横井大平履歴雛形」(月日不明)

### 【積文】

横井時明(横井平四郎の兄)君ノ第二子  
横井大平、幼名倫彦ト云。

- 一、何年何月、熊本水道丁邸ニ而誕生。
- 一、何年何月より何年何月迄、神戸勝先生塾詰。
- 一、何年何月より長崎ニ而洋学修行。
- 一、〇何年何月、洋行。  
米國何州何学校え入校。右入校ニ付、外国生ハ不入校則之処、御兄弟ノ儀ニヨツテ許可。外国生入校嚙矢(最初)ナリ。
- 一、〇右留学中、先生〔小楠翁〕ノ御變(訃報の意)ヲ聞、直ニ帰朝之積ニ而、行李ヲ埋(うず)メ候処、大平君存付(気付き)ニ而出立之際、小楠翁より、吾身上ニ付如何様ノ事有之トモ、決而帰朝セズ、一圖ニ学業ヲ成就セヨトノ嚴命アリタル事ヲ思出シ、情ヲ忍ンデ居留勉学ナリ。病ニヨツテ何年何月帰朝。
- 一、〇帰朝、熊本藩改革、洋学校取興ニ付盡力。野々口(為志)より調参候上、書加之事。
- 一、何年何月、何歳ニ而、熊本堀端邸ニ而病死。出京町往生院(横井家菩提寺)先塋(せんえい、祖先の墓所)之場ニ葬。

### 【解説】

この「横井大平履歴雛形」は「月日不明」であるが、前掲の明治三年三月五日付の㉓ A150「町田(久成)外務大丞書翰」とは関係なく、前述した通り、おそらく別便で海軍省から

「横井大平履歴」の提出を求める公文書が送付されてきていた。その時期は沼川三郎(大平)死去の明治四(1871)年四月二日(享年22歳)の前後かそれ以降であろう。

兄左平太は叔父小楠暗殺に伴う横井家の家督相続の手続きに、米国留学から「明治四(1871)年未冬」(十一月十九日)に一時帰国した。帰着後直ちに、左平太は死去により未提出のままであった「海軍省」提出用の「横井大平履歴」の作成に取りかかり、この公文書の「雛形」を基に構成を考え、さらにつぎの二項目を付け加えたものと思われる。

それは「一、帰朝、熊本藩改革、洋学校取り興しに付き尽力。野々口(為志)より調べ参り候上、書き加への事」と「一、何年何月、何歳にて、熊本堀端邸にて病死。出京町往生院、先塋(せんえい、祖先の墓所)の場に葬る」云々であった。

この「雛形」に筆を加えたのは大平の兄左平太自身であったことは間違いない。遅れて帰国した左平太は、先に帰国した弟大平が「帰朝、熊本藩改革、洋学校取り興しに付き尽力」したということを詳細に知る由もなかった。そこで「野々口(為志)より調べ参り候上、書き加への事」と記していた。

即ち旧知の間柄であった野々口為志であれば、「熊本洋学校」設立に奔走・尽力した弟大平の様子を、唯一の協力者として承知していたと思い、そこで野々口為志を尋ね、直接会って詳細に聞き知った部分を追記すべく、わざわざ書き留めたとはいえない。

そして左平太は、「海軍省」からの正式文書の「横井大平履歴雛形」に加筆・構成した内容に基づいて、提出用の「横井大平履歴」(下書き)を作成、つまり「横井大平履歴雛形」と「横井大平履歴」は一連のものである。

後述するように、左平太も同様に「雛形」に基づき、㉔ A131「伊勢佐太郎履歴」を海軍省宛に提出するが、その末尾に「過日、海軍省より米国留学中之履歴明細ニ相認め、さし出可申旨申参り候ニ付き、如此相認め、先日さし出置キ申候」の鉛筆書きがある。

## 2、㉔ A152「横井大平履歴」(月日不明)

以上の過程を踏んで作成されたのが、この㉔ A152「横井大平履歴」(月日不明)である。作成者として一番相応しい人のはやはり兄の左平太であってこそ、弟大平の正確な履歴の記載が初めて可能になる。大平の死後の「明治四(1871)未冬」に帰着したとは言え、適任者は兄左平太しかいなかった。

しかし「雛形」(骨子)と「横井大平履歴」では若干文言や内容の違いがある。例えば誕生地に関して、前者の「熊本水道丁邸」は弘化二(1845)年以前のものであるが、後者の「熊本相撲街の家」は弘化三(1846)年以降で、わずか一年違いであるが、時系列的に正しく記している。このように構成・作成の過程で新たに判明した事実によって書き直しや書き加えを行なっている。

また「雛形」では「先生ノ御變」を傍線で消し、その横に「小楠翁ノ御變」と訂正している。最初「先生」の文言から、小楠門弟の一人になるものではないかと推定したが、おそらくそうではなく、「海軍省」の公文書の表記であり、左平太の訂正と見る方が妥当であろう。

しかし左平太は、何故「海軍省」の「雛形」にあった「先生ノ御變」の部分を「小楠翁」即ち「小楠老の敬称」に書き直したのは、仲父小楠の暗殺事件を弟大平にとってより身近な事件として表現にしたかったのかもしれない。

いずれにしても、つぎの㊦A152「横井大平履歴」(月日不明)は、左平太が加筆した「横井大平履歴雛形」に依拠したものである。以上のことを踏まえて本文の検討をしていきたい。なお「横井大平履歴」の〔 〕は訂正・加筆、( )は引用者註である。

## 【釈文】

### 横井大平履歴

横井大平ハ熊本藩士横井時明君ノ第二子ナリ。幼名ハ倫彦ト云フ。後祖父(四代横井時直、大平)ノ名ヲ襲、大平ト改ム。

年月日(嘉永三[1850]年、月日不詳であったが、後掲の墓誌には「嘉永二(1849)年四月八日」と記す)、熊本相模(まま、相撲)街の家ニ生ル(大平の生誕日からして、この生家は正確である)。幼ヨリ(〇〇で消し、横に〔性質〕を書き添え)、明敏ニシテ深沈(沈着)ナリ。時明君歿後尚幼ナリ。兄左(まま、佐)太郎ト共ニ、仲父

(父時明の弟)小楠先生ニ育成セラル。

文久十一(まま、二[1862]年閏八月頃)年、江戸蕃書調所(この年に一橋門外に移転。洋書調所、翌年開成所と改称)ニ於テ英書ヲ学ブ。後勝海舟、幕府ノ命ヲ以テ、海軍操練所ヲ神戸ニ設ケ、専ラ海軍ノ創起・隆盛ヲ圖ル。小楠先生乃チ姪兄弟ヲ勝氏ニ托シ、海軍實修ニ従事(セシム)。

然シテ、會(たまた)マ幕府荊藜横遮(けいしんおうしゃ、いばらとはしばみで行方を阻むこと)、勝氏意ヲ伸ルヲ得ス。任ヲ解テ東帰ス。是ヲ以、兄弟帰テ、長崎ニ遊ビ、蘭人某(オランダ系アメリカ人フルベッキ)ニ就テ、英書ヲ修ム。而シテ兄弟相與(とも)ニ謀テ曰、海軍ノ業ハ親(したし)ク、西洋ニ之(いき)テ学ブニ非レバ、其成效(まま、成功)ヲ得ベカラスト。

是ニ於テ、同ク洋行ノ志ヲ起ス。然レトモ、當時幕制尚未タ嚴ニシテ、公然渡航ノ請願、容易ニ許可セザルヲ測リ、熊本藩主(細川12代斉護)ニ其旨趣ヲ陳請シ、其黙許(黙認)ヲ得テ、以テ〔北米〕合衆国ニ渡航ス。即チ慶應二(1866)年某月(四月二十八日)ナリ。

兄弟直チニ海軍大学校ニ入ラント欲スレトモ、合衆国ノ制、未タ外国人ノ入校ヲ允(ゆ)ルサザルヲ以テ、乃チ同政府ニ請願ス。政府以テ之ヲ国会ニ付ス。国会之ヲ可決シ、而シテ入校スル事ヲ得タリ〔外国人ノ同国海軍大学ニ入校スルハ、之ヲ以テ嚙矢トス〕。是ヨリ海軍ノ学業ニ従事シ、或



写真1 横井大平墓(中央自然石)左脇に横井和子氏建立の新墓誌

ハ實地練習ニ從テ、歐洲諸港ニ巡航セリ。

明治二(1869)年、小楠先生遭難ノ凶訃(きょうふ、凶弾に倒れる訃報)米國ニ達ス。兄弟愕然、萬事ヲ措テ、直チニ帰朝シ、奸賊ヲ捕獲シテ、迷魂(浮ばれない小楠の魂)ヲ慰シ、以テ憤恨(怒りと恨み)ヲ排セントス。

大平、再思シテ曰ヘラク、我兄弟嘗テ國ヲ発スルニ臨テ、仲父(小楠)戒メテ曰ク、時勢斯ノ如シ。〔我〕若シ不慮ノ禍害ニ遭フトモ、汝カ輩、必ス復讐ノ事ヲ企圖ス可ラス。但(ま、唯)他ヲ顧ミス、己レガ志ス所ノ業ヲ成シ、以テ報國ノ器トナラン事ヲ要スベシト。

其言今猶耳ニ存ス。豫(あらかじめ)メ今日ノ事ヲ察スル者ノ如シ。此教戒、豈水泡ニ付スベケンヤト。是ニ於テ、兄弟、意ヲ留学(在留)ニ決シ、愈精神ヲ發揮シテ業ヲ勉ム。

年ヲ踰(こえ)テ、大平肺患ニ罹リ、醫ノ勸告ニ從テ帰朝、病ヲ養フ。時ニ天下維新ノ政治ニ風靡ス。從テ熊本藩政モ亦改革アルニ際シ、旧來ノ學校ヲ全廢シ、更ニ洋学校ヲ設立シ、洋人ヲ招聘シテ、教師トセントス。

然レトモ、天下未タ洋学校及洋人招聘等ノ挙有ルノ藩ナシ。人多クハ、其指針及施為(事業を実現する)ニ憚(はかな)シ。故ニ大平、其顧問ト為リ、遂ニ學校ヲ組織シ、米國ノ教師(L. L. ジェーンズ)ヲ招聘セルハ、蓋シ其尽力ニ由レルナリ。

明治四(1871)年ニ至リ、病漸ク重ク、某月日(四月二日)、終ニ熊本堀端ノ家ニ於テ、簀(さく)ヲ易(か)フ(死床を取り換えるの意から死去)。齡二十何年(数え年で二十二才、後述の墓誌では二十三歳)、熊本出京町往生院境内、先塋(せんえい、祖先の墓所)ノ傍ニ葬ル。

#### 【解説】

この㊤A152「横井大平履歴」(月日不明)は、一行22字×20行(440字)の特製の原稿用紙の升目に、現在の筆ペンのような細筆を使って、公文書風に一字一字丁寧に埋めるように書いている。この書き方から公文書作成の経験のある人物と推定できる。

また前の「雛形」に従って、野々口為志に聞いた大平の尽力によって、死後に開校された「熊本洋学校」の経緯や埋葬された菩提寺(熊本出京町往生院)のことまで記しているの、これまで見てきたことも含めて、兄左平太の筆になるものと思われる。

ただ「横井大平履歴」には、例えば大平の誕生日は「年月日」のまま、また享年は「齡二十何年」という書き方をする

など、生没年に関しては、そこまで正確には知らなかったのか書けていない。兄の左平太であれば、誕生日や享年を知らないはずはないので野々口為志であったかもしれない。

そのことから、この「横井大平履歴」はあくまでも左平太による草稿であり、「海軍省」に提出する正式な「横井大平履歴」には、ちゃんと生没年月日が入っていたと思われる。ただこれまで大平の「年月日」について、いろんな関係書籍で調べてみたが、いずれもその生年の嘉永三(1850)年のみで「月日」までは記されていなかった。

令和三(2021)年六月二十六日、本論に掲載した往生院境内の「横井大平之墓」(写真1)を撮影に行った時、写真左脇に小楠の曾孫横井和子氏建立の「横井大平君墓誌」があり、つぎのような漢文(撰者不詳)が記されていた。

君姓横井通称大平。時明君之第二子。母不破氏。嘉永二年四月八日生。性聡敏、穎悟、志識過人矣。時天下多事、君以起海軍為志、與兄受學於勝飛川(氷川)先生。繼而相共遊米利堅。時年十七。我朝賜俸留学四年。君不幸罹病、不果業歸國。藩方起洋学校、君實有力焉。明治四年四月二日没。年二十三、葬往生院。

#### 【試読】

君ノ姓ハ横井、通称ハ大平。時明(父横井左平太)君ノ第二子ナリ。母ハ不破氏(清、細川藩士不破敬次郎娘)。嘉永二(1849)年四月八日生レ。性ハ聡敏(頭脳聡明で素早い判断ができる)、穎悟(えいご、才知に優れさとく賢い)ニシテ、志識(志と見識)ハ人ニ過グレリ矣。時ハ天下ノ多事、君ハ海軍ヲ起スヲ以テ志ヲ為シ、兄ト共に勝飛川(氷川、海舟)先生ニ於テ受學(指導を受ける)ス。繼イ而相共ニ米利堅(アメリカ)ニ遊(遊学)ブ。時年十七、我朝(日本政府)ノ賜俸(官費支給)ニテ留学スルコト四年。君ハ不幸ニシテ罹病シ、業ヲ果タサズシテ帰國ス。藩方(肥後藩)洋学校ヲ起スニ、君ハ實ニ力有リ焉。明治四(1871)年四月二日没。年二十三、往生院ニ葬ル。

通説では、横井大平の生没年は嘉永三(1850)年生まれ明治四(1871)年死去となっていたが、この「横井大平墓誌」では、誕生は「嘉永二(1849)年四月八日」で、没年は「明治四(1871)年四月二日」、享年は従来二十二歳ではなく、二十三歳となっていた。

再び「横井大平履歴」について見ていきたい。左平太は自分の名を「兄左(ま、佐)太郎」と変名を使用している。帰国後の大平も自らは「沼川三郎」の変名のまま使用し続けた。しかし兄左平太は、この「横井大平履歴」では弟を「横井大平」と本名で記している。

また左平太は、叔父小楠の暗殺事件の表記を、雛形の「先生ノ御變」から「小楠翁ノ御變」に変えていたが、さらにこの履歴では「小楠先生遭難ノ凶訃」と、今度は第三者的な表現に変えている。おそらく「海軍省」提出の公文書であるので、「小楠翁ノ御變」という身内的な表記を、さらに「小楠先生遭難ノ凶訃」としたと推測している。

しかしその一方で、「我兄弟嘗テ国ヲ発スルニ臨テ、仲父戒メテ曰ク」のように、「我兄弟」や「仲父」のように身内的な書き方もしている。また「其言今猶耳ニ存ス。豫(あらかじめ)メ今日ノ事ヲ察スル者ノ如シ」などは、左平太や大平の直接体験に基づく表現があり、公文書の形式から大きく離れてしまっている点も見られる。

これらのことから、「横井大平履歴」の下書きを書いたのは兄左平太以外には考えられないが、ただこの「横井大平履歴」の書体は左平太とは若干異なるような気もする。これは誰か、前述した野々口為志に推敲を依頼し、その後左平太が正式に清書して「海軍省」へ提出したのかもしれない。

### 三、横井大平の尽力と「熊本洋学校」の開校

左平太は、弟大平の「熊本洋学校」の開校への思いと情熱、そして実現のための尽力について、よく知っている野々口為志に尋ねて、そのことを含め、左平太は前掲の「横井大平履歴」の下書きでは、「時ニ天下維新ノ政治ニ風靡ス。従テ熊本藩政モ亦改革アルニ際シ、旧来ノ學校ヲ全廢シ、更ニ洋学校ヲ設立シ、洋人ヲ招聘シテ、教師トセントス。然レトモ、天下未タ洋学校及洋人招聘等ノ挙有ルノ藩ナシ。人多クハ、其指針及施為ニ憐(はかな)シ。故ニ大平、其顧問ト為リ、遂ニ學校ヲ組織シ、米國ノ教師(L. L. ジェーンズ)ヲ招聘セルハ、蓋シ其尽力ニ由レルナリ」と書いた。

何故野々口為志(藩士、350石)は大平を知っていたのか。その背景について、その著「故護久公御事績調」の中で、つぎのように書いている。その要旨を見ておきたい。

為志は文久三(1863)年頃、長崎留学を命じられ、「洋学」修行をしていた。慶応二(1866)年四月に小楠の二甥左平

太・大平が米国留学したが、おそらくその経緯を間近に見聞していたかもしれない。

明治二(1868)年に、大平は肺患で帰国した後、「長崎に療養中」に、為志としばしば出会う機会があり、四方山の話の末、大平が「今、年少子弟の教育に従事せられんには、先ツ我郷里熊本に完全なる一の学校を設立せられる事、差寄急務に可有之」と言うのを聞いて、為志は「共に其事に尽力せんこと」を誓うなど、意気投合したと記している。

#### 1、「熊本洋学校」開校前後の肥後藩の動向

まず潮谷総一郎著『熊本洋学校とジェーンズ、熊本バンドの人びと』所収の郷土史家下田曲水作成の「熊本洋学校略年表」によって、「熊本洋学校」開校までの経緯を紹介するが、その記述内容には若干不正確さが見られるので、他の書籍で補完し、月日の挿入及び内容は、細川家編纂所『改訂肥後藩国事資料』に依拠して〔 〕内に補足しておいた。

##### 明治元(1868)年

6月 野々口為志(又三郎)、熊本洋学に、熊本人の先覚者岡田楨蔵を重視すべしと説き、洋学倡方として「熊本洋学所」の教官に任じる。

11月9日 洋学校員〔御國幼年之面々え指南方として御雇入〕として洋学の先達名村泰蔵を長崎より熊本に招く。

##### 明治2(1869)年

3月18日 余田司馬人(よでんしまと、1857.4.14～没年不詳)、通弁修業生として長崎留学を命ぜらる。長崎廣運館に入り、2年間米人ヘンリースタットに付き専ら英語を修業する。(その後の余田は、明治四年九月一日「熊本洋学校」に入学、同八年七月二十六日に普通学科〔中学課程〕卒業、その後第五高等中学校の立ち上げに庶務として深く関係し、後に助教・熊本高等工業学校助教授兼書記となる)

3月23日 米国滞在伊勢佐太郎(左平太)・沼川三郎(大平)、更に外国留学を命じられる。〔東京より行政官名で、細川中将(護久)呼出にて「其方家来伊勢佐太郎・沼川三郎儀、兼而外國留学罷在候處、今般改而留學被仰付候間、此旨相達候事」〕

11月 熊本に洋学所(英学所)新設、洗馬町梓屋、軍艦所ともいう(教師岡田楨蔵)

年末 横井大平、米国より病氣帰朝(是より先、横井左平・大平兄弟は叔父小楠の世話にて留学)

### 明治3(1870)年

- 5月 洋学所、藩費生徒15人を置く。
- 7月8日 洋学所廃止(宝曆以来の藩学時習館共に、この際廃止となる)。この時、洋学所は暫く置置とあり(居寮28人、倡方2人)、英文典書42冊を洋学生に処分するという。岡田撰蔵は「洋学所」の廃止とともに免ぜられた。
- 8月27日 野々口為志、洋学所創設の要務にて長崎出張。〔野々口又三郎儀、西洋學取起ニ付、右用懸申付、明後廿七日天赦丸より長崎表え差越候條、此段可達事〕
- 10月24日 在長崎の庄村省三に、洋学所建築・教師舎宅建等につき、至急職工雇入れの用務にて、赤星某(池上の人)長崎出張、大工、職人雇備交渉。長崎遊学生の〔永滞留之不宜〕と肥後藩内に〔不遠洋学校も被建置候事ニ付〕総引揚げを通達する。
- 閏10月20日 洋学所再興、職員任命〔洋学所幹事野々口為志、洋学所漢籍教導兼坂淳次郎、洋学所事務岩男内蔵次・西村又八〕、冬、余田司馬人、長崎より呼返さる。(洋学所入学)
- 11月14日 洋学所入学心得を藩庁より通達(参事名義)、規則書制定、入学者募集。長崎にて洋学修業中の野々口為志、洋学誘導方を命ぜられる。

### 明治4(1871)年

- 4月3日(まゝ、2日) 野々口為志と共に洋学校設立運動中の横井大平病死(22歳)
- 6月8日 玉名純一、洋学所英学句読師となる。
- 7月14日 廃藩置県、某日ジェーンズ(米人砲兵大尉)招聘に応じ東京到着。設立準備追々整う。野々口為志、ジェーンズ東京出迎え。
- 8月 ジェーンズ熊本着(百貫石より熊本へ)。従来の洋学所を洋学校と改称し、ジェーンズを教師として接続す。ジェーンズとの契約書、雇傭三年契約、月給400ドル(のちに400円に改める)、米国よりの赴任旅費支給(帰路はなし)、洋風住宅の無償提供、病気休暇は自由、夏季一か月・冬季半月間・毎日曜日の休暇など。
- 9月1日 洋学校開校
- 10月 洋学校教師舎宅(洋館)竣工すという。

## 2、「洋学所」設置

この下田曲水の「熊本洋学校略年表」には、横井大平の動向がほとんど記されていない。そこで森田誠一「肥後細川藩における洋学の受容」(田中啓介編『熊本英学史』所収)や荒

木精之「横井大平」(熊本県教育委員会編『熊本県近代文化功労者』所収)、熊日選書『ジェーンズ熊本回想』や私が担当・作成した熊本県(文化企画室)主催『古文書にみる熊本の教育展』-「キャプション(解説)集」などにより補足しながら見ていきたい。

横井大平は、滞米中の肺患で心ならずも帰国を余儀なくされ、明治二(1869)年七月頃に離米、八月頃に帰朝、十二月頃には長崎の「肥後御屋敷」で肺病治療を続けていた。頓挫したものの、大平は渡米留学で体験した新文明と祖国の現状との余りの格差に失望、生命のあるうちに開明的な肥後藩に導きたいとの強い願望を持っていた。

荒木は「横井大平」で、「大平は新たに洋式教育を施す藩立洋学校の設立こそがおのれの使命と考え、藩当局に建言した」と記すが、それだけではなかった。つぎに記す兄左平太が滞米中に直接体験した洋学修得の苦労はそのまま大平の苦労でもあった。

左平太は前号で紹介した書翰で、「最早我が晩学・不才にては、とても充分西洋技芸の学科を学び成すこと能わず」と努力の限界を吐露、「洋学」の修得に不可欠な「言語能力」の涵養、また膨大な修得の内容と科目のためには、「幼年間より取り興し」しなければ、「記憶(憶)の力も弱り」、「真の成業難かるべく」と、早くからの「洋学」開始の重要性を指摘していた。

明治元(1868)年六月、野々口為志(又三郎)は、藩に岡田撰蔵について、熊本の洋学には熊本人の先覚者として重視すべしと説き、洋学倡方として「熊本洋学所」の教官に推薦した。さらに十一月九日には、長崎より洋学の先達名村泰蔵を「御国幼年之面々え指南方として御雇入」として熊本に招き、熊本藩の洋学所が創立されている。

岡田撰蔵(岡田武一、?~1876.1.17没)は、大江村砲術家長嶺雲七の養子として同家に養われ、蘭方医寺倉秋堤の門弟となり、安政六(1855)年二月、緒方洪庵の「適塾」に入り、文久三(1863)年十二月、江戸に出て福沢諭吉の「慶應義塾」に入り、塾長になっている。また慶応元(1865)年閏五月、幕府の英仏使節(外国奉行柴田日向守剛中の特命理事官)に総勢七人の通弁として随行、翌年紀行文『航西小記』を著している。パリで実用化されたばかりの点字を日本に初めて紹介し、また帰国後は各地で教育者として活動、長崎で留学生引廻役をしていた。

政府は明治二(1869)年六月十七日、「版籍奉還」を実施、旧藩主を藩知事(知藩事)に任じた。そんな最中、統出する

東京・長崎などへの遊学の弊害から、肥後藩は十一月頃、洗馬町に「洋学所」(英学所)を起し、岡田撰蔵を正式に熊本藩の「長崎留学生引廻役」に任じ、「誘導方」(教師)とし、野々口為志も「倡方」(庶務)とした。為志は「洋学所たるや規模甚ダ小にして、未だ為志らの宿志を充たすに足らざるを以て」、拡張を願い出たが断られていた。

同三(1870)年七月には、後述の「肥後の維新」を契機に、名村泰蔵などの協力を得て創立した藩立の「洋学所」の廃止とともに、岡田撰蔵も免職された。その岡田は、明治四(1871)年には寺倉秋堤の養子となり、長女雪と結婚、その後上京して海軍省の権秘書官となった。明治五(1872)年には明治天皇西遊の時、従四位権大秘書官として随行、のちに病で帰郷し、明治九(1876)年新屋敷の自宅で死去した。ついでながら、女優の岡田嘉子は孫に当たる。

前述した通り、「洋学所」はすでに明治元(1868)年に創設されていたが、旧藩主細川韶邦(よしくに)と守旧派(学校派)の下では、大きな効果を発揮する状況にはなかった。明治三(1870)年五月、実学派による藩政改革直前の「洋学所」は藩費生徒(居寮生)15人と少なく、また七月の廃止時でも居寮生28人と低調であった。後述するように、「洋学所」(英学所)と言っても名ばかりで、その教授内容は英語よりも漢籍が重視されていた。

### 3、「肥後の維新」と「洋学所」の再興

徳富健二郎(蘆花)がその著『竹崎順子』で「肥後の維新」は、明治三年に来ました。それは横井小楠がかねて囑望し遠ながら誘掖して置いた世子細川護久が家督を相續し、熊本縣藩知事となり、勅許を得て弟長岡護美と藩政改革に帰って来たのがきっかけでした。横井死後満一年で、横井の時代が肥後に来ました」と記している。

明治三(1870)年七月七日、その「肥後の維新」即ち藩政改革では、小楠の門弟たちにより「小楠実学」的な政策が実施され、新知藩事の細川護久は藩内に十七日「村々小前共に」を公布、雑税廃止を宣言したが、明治政府の横やりもあって実現化するまでには至らなかった。

藩庁は七月九日付で、旧藩の「学校(藩校「時習館」)・再春館(診療所兼医学校)及び郷学校・洋学所は暫く畳み置く」との布達を出した。宝暦五(1755)年開校の「時習館」(当時居寮生88人)、同七(1757)年創設の「再春館」、そして明治二年開所の「洋学所」(英学所)も同時に閉鎖されることとなった。

明治三年の「肥後の維新」当時、藩当局には藩知事細川護久・大参事細川護美・権大参事米田虎雄(虎之助、長岡監物〔是容〕の次男)・少参事山田武甫(横井小楠門弟)らがいた。大平は、藩庁に自らの渡米留学の経験をもとに、熱心に「洋学」の重要性を説き、一日も早く「洋学所」を基盤に「洋学校」を起し、教師も直接米国から招聘することの重要性を力説していた。

山田は大平の熱意に動かされ、米田に相談し、細川護久に言上した。護久も「洋学校」の開設を異議無く承知し、早速藩庁の議に付し、直に実行に移す決断をした。

大平の描いた設計図に従って、「洋学校」の準備は着々と進んだ。明治三(1870)年八月二十七日、藩庁は野々口為志を「西洋学取起二付」、即ち「洋学所」創設の要務にて長崎に出張させ、十月二四日には、在崎の庄村省三に「洋学所」建設と教師舎宅建等の職人(西洋建築の熟練工)雇入れと在崎留學生の総引揚げを命じ、さらに赤星某(池上の人)を長崎に出張させ、具体的な大工・職人の雇備交渉に当たらせた。

閏十月二十日には「洋学所」は再興され、野々口為志を幹事兼洋学誘導方に、兼坂淳次郎を漢籍教導、さらに事務に岩男内蔵次・西村又八を発令、冬には余田司馬人を長崎から呼び返し、「洋学所」の職員に任命した。

十一月十四日に「洋学所」の入学者募集が始まった。「洋学所入学心得」は藩庁より参事名義で通達、「規則書」(契約書)を制定し、入学者の募集を開始している。その「規則書」には、「洋学所」再興の目的と決意がつぎのように明記されていた。

方今洋学日に開、此道に志す人も、亦日を迫る相増といへども、洋学真意を学び得る人なきは、全く洋学之道不明によれり。去は此学を起すには、斯道を得ると、学館を設ざる事を不得、故に今般於藩内、新に洋学所を設け、教師を萬里の外より招、童蒙(子供)をして主一に修行之道を立て、所謂小学校の教を施し、根底を定め、各長所にしたかひ、萬科之学に進る事、最洋学の大事なれば、専ら彼規律に頼り、常住座臥(いつでも、ふだん)、不倦不撓(ふけんふによ、倦まず弛まず)之真才(本当の才能)を生じ、集而大成の日なくんば、洋学の真意を失ふ而已ならず、弊害不可救に至る事燦爛(さんらん、明々白々)たり。是新に洋学所を設るの大綱なり。(後略)

また「洋学所」の修業期間は「三年を一期」、募集対象は「藩内の士民秀才」即ち武士・庶民の身分に関係なく秀才の50人であった。その選抜試験の科目は、「四書二経」(10歳～11歳)、「左伝・史記」(12歳～13歳)、「綱鑑・通鑑」(14歳～15歳)であり、漢籍習得が前提条件であった。

さらに「右科目只今相当致さず(現時点で合格点に達せず)トモ、年齢且つ往々見込みこれ有る者」や「試検之上、一度之手数(一度の試験での結果)ニテハ明了(明瞭)致し難く候間、漢籍教導官塾寄留せしめ、得斗(とくと)試検に及び、當六月入生差し許す筈」とし、「寄留日限ハ、洋学校ヨリ直ちニ申し達す筈」との条件が付され、また「専ら洋書課業にのみ長し、孝貞忠信を忘れ、漢籍ニ疎く相成ニより、漢籍之教導を立、毎日時限を分ち、教導すべき事」の条が設けられていた。

この背景には、横井小楠の「堯舜・孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くす」に代表される「小楠実学」への志向とその実行にあった。即ち「洋学」(「西洋器械の術」)を学ぶ前提として、その基盤に「四書五経」(「堯舜・孔子の道」)の素養を重要視していた。

事実、「竹崎律次郎年譜」によれば、小楠門弟の竹崎茶堂(律次郎)が、明治三(1870)年十一月「洋学所・治療所(共同使用教室)に出仕」し、十二月には「治療所で漢籍教導」を命じられていた。

ただ余田司馬人は、「洋学所」の様子を「通学合せて生徒五〇名であったが、課業は漢字ばかりで、洋学所といふは名ばかりであった、翌四年になっても、依然漢学の授業であった」と述懐するほどであった。

#### 4、「熊本洋学校」の開校

前述したように、知藩事細川護久は、「洋学校」の開設を承諾し、藩庁の議に付した後、直ちに実行に移した。為志は前出の「故護久公御事績調」の中で、「私に時の小参事山田武甫に、完全な洋学校を設けんとならば、是非とも西洋教師雇

入の必要なる事を建議」したと記す。

この建議は、長崎で加療中の大平が、「御雇外国人教師」の招聘を実現したいとの強い要望を反映したものであり、さらに「洋学所」の「規則書」に、わざわざ「今般於き藩内、新に洋学所を設け、教師を萬里の外より招」云々と書き込んだのも、ただ入学者募集向けの文言ではなく、二人の熱い要望の具体的な意思表示として明記したものであったとも言えよう。

ただ藩庁は、肥後藩には肥後勤王党ら「攘夷家の余燼未だ全く消滅せざる今日に於て、西洋教師を雇入れ、之を熊本に居住」させたら、「如何変事を惹起さん」も計り難く、「俄に決行の様無之」と、二の足を踏んでいた。

大平は病身を押して、長崎より帰藩、藩当局に趣旨の説明と説得、さらにその間の周旋などに大活躍し、ついに米田権大参事の同意を得て、外国人教師の雇入れを決定させている。その時大平は、藩当局の「如何変事を惹起さん」の心配に対して、肥後藩では百年待っても攘夷派のあと絶つ日はないこと、開明的な米国でも攘夷派は沢山いることなど、「攘夷を恐れていては洋学校の設立はできない」と真剣に説得したという。

大平は、米田に「御雇外国人教師」の招聘がかなり高額な俸給になっても、「当今藩庁にてハ、専ら兵式の改革に従事致され候ニ付、米国の風紀厳肅、高い学問と教養のある「非



写真2 熊本洋学校(『写真集 熊本100年』より)

役士官(退役将校)を雇入れて、之れが教師とせられなば、学校教育を主(つかさど)らしめるゝ傍ら、兵式改革の顧問にも資せらるゝことを得て、我藩の利益少なからざるべし」と、「御雇外国人教師」の採用が、藩の意向にも合致するなど一石二鳥と言っている。

米田は大平が若年ながらも小楠の愛甥で、何しろ留学経験を持つ新帰朝者であり、その見識にも敬意を表していた。米田も遂に大平の「洋学校」の設置と外国人教師の雇入れの提案に同意し、ただ外国人教師の雇入れについては、大平の尽力に期待して一任した。

このような経過の下、「熊本洋学校」の開設は大平の双肩にかかり、敷地の設定・校舎の建設、「御雇外国人教師」の人選と招聘、その舎宅(洋館)の準備まで、すべてを同時進行で実行に移さなければならなかった。この過程で、大平は「熊本洋学校」の敷地として、熊本城の「古城」(現・県立第一高校内)を選定・決定した。(写真2)

肝心の「御雇外国人教師」の選定には、嘗て左平太・大平兄弟の密航渡米に協力・尽力してもらったフルベッキ(Guido. H.F. Verbeck, 1830~1898)に相談し協力を得ることにした。肥後藩の希望は、アメリカのウェスト・ポイント陸軍士官学校の出身者で、南北戦争に参戦し、かつ教官の経験を持つ者という条件を付けていた。

明治二(1869)年二月、フルベッキは政府の太政大臣三條実美の要請で「開成学校」の設立に携わり、四月には東京帝国大学南校の教師となり、のち教頭となる。大平はフルベッキに会いに東京まで出向き、前述の肥後藩の条件にあう退役将校の人選を依頼し快諾を得た。

大平は帰途に高輪でかつての肺患が再発、一時危篤状態に陥った。しばらく静養した後、長崎まで帰ると、藩当局に書を送り、直ちに野々口為志の長崎出張を請うた。前掲の「熊本洋学校略年表」にある明治三(1870)年八月、野々口為志の「洋学所創設の要務にて長崎出張」云々に当たる。

大平が帰朝した当時、長崎でこつこつと英語の勉強をしていた野々口を見込んで、洋学校の設立への協力を依頼・説得して承諾を得ていた。おそらく大平が野々口を名指しての長崎出張を要請した背景には、この機に再び野々口に協力の意思を確認し、洋学校立ち上げ実動のための本格的な依頼をしたかったのかもしれない。

しかし再発した大平の病気はその後もはかばかしくなく、長崎の仮寓で臥床しながらも、「洋学校」の進捗状況を気にかけていた。明治四(1871)年になると、藩当局は野々口

に、大平を「洋学校」の羅針盤として帰藩させ、学校の一舎に寄宿・保養させ、かたわら相談役にしようと話していたが、それも間にあわず、四月二日に病死(22歳)した。

大平亡き後の明治四年六月八日には「玉名純一、洋学所英学句読師」となるなど、設立準備は整っていった。七月十四日、明治政府は「廃藩置県」を実施した月に、L. L. ジェーンズ(Leroy. Lansing. James, 1838~1909 米人砲兵大尉)が招聘に応じ、家族と一緒に東京に到着、野々口為志は上京して、フルベッキと共に出迎えた。ジェーンズ一行は東京から瀬戸内海を経由して長崎港に、さらに嵐の中、身の危険を感じながら、島原経由で、八月に百貫石に着船、やっとの思いで熊本城下に着いた。

この時点で、従来の「洋学所」は「熊本洋学校」と改称、ジェーンズを教師として迎え入れ、ついに九月一日に開校した。翌十月に洋学校教師の舎宅(洋館)が竣工した。こうして、病身ながら尽力した横井大平の「熊本洋学校」開校の思いは、大平の死の五ヶ月後、ついに成就・実現した。

「熊本洋学校」では、ジェーンズによるアメリカ式授業が行われ、通訳を置かない英語と原書による文字通りの「洋学」で、キリスト教精神に基づく西洋的合理主義に基づく学問が実施された。

授業内容は中学校程度で、最初はウェブスター・スペリング一冊、ウキルソン・リーダーを使用していたが、その後の授業内容は、英語・英作文・英語スピーチ・英文学、算数・代数・幾何・測量、物理・化学、天文・地質学、生理学、万国史など充実していった。

また先輩が後輩の学習を手伝う「自学習」(Teaching is learning)や日本最初の「男女共学」の実施、『生産初歩』にみる米・絹・茶などの集中生産方式による合理的農法の積極的指導など、明治期の熊本では、当時の日本で最新の「洋学」教育と殖産興業の基盤と実施が試みられていた。

さらに思想・宗教面では、キリスト者としてのジェーンズが、洋学生徒たちに「洋学」以外にも多大な影響を与えた。感化を受けた生徒たちは「花岡山の誓い」(「奉教趣意書」の奉読・署名)を行なうなど、「熊本バンド」の形成に繋がることになる。

保守的な熊本県は、この「熊本洋学校」の開校により、これまで予想もつかなかった物心両面で、独自のアメリカ的な「文明開化」が実施され、近代化の幕開けに一役買い、後に日本で活躍する多くの若い人材を輩出する契機ともなった。

## おわりに

今号では伊勢佐太郎（横井左平太）の弟沼川三郎（大平）についてのみを紹介することにした。兄の伊勢佐太郎（横井左平太）の履歴関係の資料に関しては、後の号で見ていくことにしたい。

もう15年ほど前になるが、横井小楠の曾孫・横井和子氏（2021年2月4日死去、享年101歳）から、小楠が二甥の左平太・大平に、自分にどんなことが起ころうとも「仇討ち」を禁止していたというエピソードを直接聞いたことがあった。

その資料的根拠が、この「横井大平履歴」の「明治二（1868）年、小楠先生遭難の凶訃（きょうふ、凶弾に倒れる訃報）米国に達す。兄弟愕然、万事を措いて、直ちに帰朝し、奸賊を捕獲して、迷魂（浮ばれない小楠の魂）を慰し、以て憤恨（怒りと恨み）を排せんとす。大平、再思して曰えらく、我が兄弟嘗て国を発するに臨みて、仲父（まま、叔父）戒めて曰く、時勢斯くの如し。我れ若し不慮の禍害に遭うとも、汝が輩、必ず復讐の事を企図す可からず。但（まま、唯）他を顧みず、己れが志す所の業を成し、以て報国の器とならん事を要すべしと。其の言今猶耳に存す。豫（あらかじ）め今日の事を察する者の如し。此の教戒豈水泡に付すべけんやと。是に於いて、兄弟、意を留学に決し、愈よ精神を發揮して業を勉む」であったことがわかった。小楠自身が二甥に「仇討ち」禁止を厳命していたことは、小楠の思想を考察・考究する上で、特記すべき重要なこととと思っている。今後の研究課題にしたい。

これまで見てきたように、横井小楠の二甥左平太・大平は慶応二（1866）年四月、海軍学を学ぶために、長崎から密航渡米した。滞米中の二甥は「洋学」の修得には英語力と学力が必要・不可欠であることを体験し、しかも年少から取り組まねば不可能であると心底痛感していた。

小楠暗殺の翌々月、明治二（1869）年三月二十三日には、米国滞在の伊勢佐太郎（左平太）・沼川三郎（大平）に、更に外国留学の継続が命じられたが、弟大平は滞米中に結核を発症し、八月には志半ばで余儀なく帰国、長崎で療養した。

その大平は帰国早々、肥後藩で「熊本洋学校」を開校することを主唱、長崎にいた野々口為志に協力を依頼、自らも藩当局の指導者たちを説得して回り、ついに「熊本洋学校」の開設を約束させ、自らはフルベッキに「御雇外国人教師」の人選と招聘を依頼、さらに教師舎宅（洋館）の準備まで、進行していた病身をもかえりみずに尽力した。しかし滞米中

の兄左平太はその過程を知る由もなかった。

明治二年一月に暗殺された叔父小楠後の横井家家督相続の手續きのために、明治四年十一月に左平太は一時帰国したが、その二月には大平はすでに死去した。弟大平のもとには、海軍省から「履歴雛形」が送られ、「横井大平履歴」提出の要請が来ていたが、死去したためにそのままになっていた。

左平太はすぐに「横井大平履歴」の作成に取りかかり、まず「履歴雛形」をもとに、大平の履歴の概要を書き出し、さらに「横井大平履歴」の下書きを書きあげた。本論では横井大平宛の書翰や公文書などによって、その経緯をたどってみた。

大平は明治四年九月の「熊本洋学校」の開校を待たずに死去した。大平の尽力による「熊本洋学校」が、どのような経緯で開校されたのか、その歴史的背景となる肥後藩の所謂「肥後の維新」前後の動向についてもかなり詳しく触れてみた。周知の通り、「熊本洋学校」は文字通り明治初期の熊本に「文明開化」の洗礼をもたらし、かつ貢献した歴史があったことは重要な事実であった。

## 【参考文献】（本号分）

- 山崎正董編著『横井小楠』伝記編・遺稿編（明治書院、1938年）  
熊本県教育委員会編『熊本県近代文化功労者』（熊本県教育委員会、1981年）  
細川家編纂所『改訂 肥後藩国事資料』（鳳文書館、1932年初版・1990年覆刻）  
高野和人編『肥後細川家分限帳』（青潮社、1991年）  
潮谷総一郎著『熊本洋学校とジェーンズ、熊本バンドの人びと』（熊本年鑑社、1991年）  
熊日選書『ジェーンズ熊本回想』（熊本日日新聞社、1983年）  
ジェーンズとハーゲン記念祭実行委員会編『ジェーンズとハーゲン記念祭～報告書』（熊本日日新聞社事業局、1992年）  
田中啓介編『熊本英学史』（本邦書籍、1985年）  
高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』（新教出版社、1978年）  
熊本日日新聞社『写真集 熊本100年』（熊本日日新聞情報文化センター、1985年）  
蘆花全集刊行会編『蘆花全集』第15巻所収「竹崎順子」（1929年）  
『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）  
拙著『古文書にみる熊本の教育展』—キャプション（解説）集（熊本県、1994年）  
拙著『横井小楠』（西日本人物誌編纂委員会編「西日本人物叢書」⑪、1999年）  
拙論「熊本洋学校」と「同志社英学校」（熊本近代史研究会編『近代熊本』第36号所収、2014年）

拙編「横井小楠書簡要録」(私家版、1986年)  
拙編「横井小楠同志・門人一覧」(私家版、2011年)  
拙著「横井小楠と二甥左平太・大平の書翰を読む」全32回(熊本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2016年1月～2018年9月)  
拙著『新進「横井小楠」学』全26回(熊本近代史研究会『近研会報』所収「くまもと近代史譚」2018年10月～2021年3月)

**Letters written by *Saheita*, Yokoi Tamako's husband, and his younger brother *Daihei* before and after their stay in the United States (8): from the archive of the family *Yokoi* in the Kumamoto University**

TSUTSUMI Katsuhiko

In April 1866, Yokoi Syonan(横井小楠)'s nephews, Saheita(左平太) and Daihei(大平), stowed away on a boat from Nagasaki, Japan to the United States to pursue their naval studies.

However, in August 1869, Daihei, the younger brother, contracted tuberculosis in the United States and returned to Nagasaki to recuperate.

The two nephews realized that learning English while young was very important to succeed in their foreign studies and working life.

On returning to Japan, Daihei worked hard to open a school for foreign studies in Higo called the "Kumamoto Western Studies School"(熊本洋学校).

The school opened in September 1871; however, Daihei could not attend the opening ceremony as he had passed away in February of the same year.

After Syonan was murdered by the Totugawa assassin(十津川浪士) in January 1869, Saheita came back to Japan to succeed Syonan in November 1871. The naval bureau had sent a career history form to Daihei for completion, 2 years after he had died. Nonetheless, Saheita prepared a draft of Daihei's resume on his behalf.

In this report, I will trace the progress of Daihei's career through letters and official documents related to him. In addition, I will examine the social currents in Kumamoto before and after the Kumamoto Western Studies School opened there.